

田敬仲完 世家

田敬仲完（陳の厲公の子、齊に奔り田氏となる）－田潛孟莊－

田文子須無－田桓子無宇－田釐子乞－田成子常－田襄子盤－

田莊子白－

(1) 田太公和－ (2) 桓公－ (3) 威王－ (4) 宣王－ (5) 潛王－

(6) 襄王－ (7) 王建

陳完は陳の厲公佗の子なり。完生まるるや、周の太史、陳に過り、陳の厲公、完をトせしむ。卦、觀の否に之く、を得たり。「是を、国の光を觀る。用て王に賓たるに利（よろし）し、と為す。此れ其れ陳に代わりて国を有たんか。此ここに在らずして、異国に在らんか。此れ其の身に非ずして、其の子孫に在らん。若し異国に在らば、必ず姜姓ならん。姜姓は四嶽（堯の臣下）の後なり。物は能く兩つながら大なるは莫し。陳、衰えば、此れ其れ昌（さかえる）えんか。」厲公は陳の文公の少子なり。其の母は蔡の女なり。文公卒し、厲公の兄鮑立つ。是を桓公と為す。桓公、佗と母を異にす。桓公、病むに及び、蔡人、佗の為に桓公鮑及び太子免（ブン）を殺して佗を立てて、厲公と為す。厲公既に立ち、蔡の女を娶る。蔡の女、蔡人に淫し、数々帰る。厲公も亦数々蔡に如く。桓公の少子林、厲公の其の父と兄を殺せしを怨む。乃ち蔡人をして厲公を誘いて之を殺さしむ。林、自立す。是を莊公と為す。故に陳完、立つを得ず。陳の大夫と為る。厲公の殺さるるは、淫にして国を出でたるを以てなり。故に春秋に曰く、「蔡人、陳の佗を殺す。」之を罪とするなり。莊公卒し、弟の杵臼（ショ・キュウ）を立つ。是を宣公と為す。

682 宣公十一年、其の太子禦寇を殺す。禦寇と完とは相愛す。禍己に及ばんことを恐る。完、故に齊に奔る。齊の桓公、卿為らしめんと欲す。辞して曰く、「羈旅（諸国を巡り、旅をしている）の臣、幸いにも負擔（檐は担に通ず、負担のことで、労役）免るるを得るは、君の恵みなり。敢て高位に当らず。」桓公、工正と為さしむ。齊の懿（イ）仲、完に妻さんと欲し、之をトす。占に曰く、「是れを、鳳凰、于きて蜚び、和鳴して鏘鏘（ショウ・ショウ、鳳凰が声を合わせて鳴く声の形容）たり、と謂う。有媯（ユウ・ギ、陳国の姓）の後、將に姜に育せんとす。五世にして其れ昌え、正卿に竝ばん。八世の後、之が與に京（おおい）いなるもの莫からん。」卒に完に妻す。

672 完の齊に奔るや、齊の桓公の立ちて十四年なり。
完卒す。諡して敬仲と為す。仲、穉（チ）孟夷を生む。敬仲の齊に如くや、陳の字を以て田氏と為す。田穉孟夷、潛孟莊を生む。田潛孟莊、文子須無を生む。文子、齊の莊公に事う。晋の大夫欒逞（ラン・テイ）、乱を晋に作り、齊に来奔す。莊公、厚く之を客とす。晏嬰と田文子、諫む。莊公、聴かず。文子卒す。桓子無宇を生む。桓子無宇、力有り。齊の莊公に事えて、甚だ寵有り。無宇卒す。武子開と釐（キ）子乞を生む。田釐子乞、齊の景公に事え、大夫と為る。其の賦税を民より収むるに、小斗を以て之を受け、其の粟を民に予うるは、大斗を以てし、陰徳を民に行う。而して景公、禁ぜず。是に因りて田氏、齊の衆の心を得て、宗族益々疆く、民、田

氏を思う。晏子、数々景公を諫む。景公、聴かず。已にして晋に使いし、叔向と私に語りて曰く、「斉国の政は其れ卒に田氏に帰せん。」晏嬰卒せし後に、范・中行氏、晋に反く。晋、之を攻むること急なり。范・中行、粟を斉に請う。田乞、乱を為さんと欲し、党を諸侯に樹たてんとす。乃ち景公に説いて曰く、「范・中行は数々斉に徳有り。斉、救わざる可からず。」斉、田乞をして之を救いて、之に粟を輸らしむ。景公の太子死す。後に寵姫有り。芮子と曰う。子荼（ト）を生む。景公病む。其の相、国恵子と高昭子とに命じ、子荼を以て太子と為す。景公卒す。両相の高・国、荼を立つ。是を晏孺子と為す。而して田乞、説ばず。景公の佗（他と同じ）子の陽生を立てんと欲す。陽生、素より乞と歎ぶ。晏孺子の立つや、陽生、魯に奔る。田乞、高昭子・国恵子に事うる者と偽わりて、朝する毎に代々る参乗して言いて曰く、「始め諸大夫、孺子を立つるを欲せざりき。孺子、既に立ち、君、之を相く。大夫皆、自ら危ぶみて乱を作すを謀る。」又大夫に紿（タイ、あざむく）きて曰く、「高昭子は畏る可し。未だ発せざるに及びて之に先んぜよ。」諸大夫、之に従う。田乞・鮑牧と大夫とは兵を以て公室に入り、高昭子を攻む。昭子、之を聞き、国恵子と公を救う。公の師、敗る。田乞の衆、国恵子を追う。恵子、莒に奔る。（“遂反子殺”は衍文）高昭子・晏孺子（晏圉の間違い、晏圉は晏嬰の子）、魯に奔る。田乞、人をして魯に之き陽生を迎えしむ。陽生、斉に至り、田乞の家に匿る。諸大夫に請いて曰く、「常の母、魚菽の祭り（魚と豆の粗饌を供えての祭り）有り。幸いにして来たりて会飲せよ。」田氏に会飲す。田乞、陽生を橐（タク、ふくろ）中に盛り、坐の中央に置き、橐を発き、陽生を出だして曰く、「此れ乃ち斉君なり。」大夫皆伏して謁し、将に盟いて之を立てんとす。田乞、誣（しいる、事実を曲げて人を悪く言う）て曰く、「吾と鮑牧とは謀りて共に陽生を立つ。」鮑牧、怒りて曰く、「大夫、景公の命を忘れたるか。」諸大夫、悔いんと欲す。陽生、乃ち頓首して曰く、「可なれば則ち之を立て、不可なれば則ち已めよ。」鮑牧、禍の己に及ばんことを恐れ、乃ち復た曰く、「皆、景公の子なり。何為すれぞ不可ならん。」遂に陽生を田乞の家にて立つ。是を悼公と為す。乃ち人をして晏孺子を駘に遷して、孺子荼を殺さしむ。悼公既に立ち、田乞、相と為り、斉の政を専らにす。

485 （悼公）四年、田乞卒す。子の常、代わりて立つ。是を田成子と成す。鮑牧、斉の悼公と郟（郟の異体、すきま）有り。悼公を弑す。斉人、共に其の子壬を立て。是を簡公と為す。田常成子、監止（宰予、字は子我）と俱に左右の相と為り、簡公を相く。田常、心に監止を害（いむ）む。監止、簡公に幸せられ、権ありて去ること能わず。是に於いて田常、復た釐子の

政を修め、大斗を以て出だし貸し、小斗を以て収む。齊人、之を歌いて曰く、「嫗（ウ、おうな）や、芑（キ、ちさな）を采る。田成子に帰す。」齊の大夫、朝し、御鞅、簡公を諫めて曰く、「田・監は並ぶ可からず。君、其れ焉を択べ。」君、聴かず。子我は（“監止之宗人也”は衍文）、常て田氏と郤有り。田氏の疏族田豹、子我に事えて、寵有り。子我曰く、「我、尽く田氏の適を滅ぼし、豹を以て田氏の宗に代えんと欲す。」豹曰く、「臣は田氏に於いて疏なり。」聴かず。已にして豹、田氏に謂いて曰く、「子我、將に田氏を誅せんとす。田氏、先んぜずんば禍及ばん。」子我、公宮に舍す。田常兄弟四人、乗りて公宮に如き、子我を殺さんと欲す。子我、門を閉ず。簡公、婦人と檀台に飲す。（其れを聞くと）將に田常を撃たんと欲す。太史子餘曰く、「田常、敢て乱を為すに非ざるなり。將に害を除かんとす。」簡公、乃ち止む。田常、出づ。簡公の怒れるを聞き、誅せられんことを恐れ、將に出亡せんとす。田氏行曰く、「需（うたがう）いは、事の賊なり（疑えば、難が至る。故に“事の賊”と云う）。」田常、是に於いて子我を撃つ。子我、其の徒を率いて田氏を攻め、勝たずして、出亡す。田氏の徒、追いて子我を（“及監止”は衍文）を殺す。簡公、出奔す。田氏の徒、追いて、簡公を徐州に執らう。簡公曰く、「蚤に御鞅の言に従えば、此の難に及ばざり。」田氏の徒、簡公の復た立ちて己を誅せんことを恐れ、遂に簡公を殺す。簡公、立ちて四年して殺さる。是に於いて田常、簡公の弟驚（ゴウ）を立つ。是を平公と為す。平公、位に即くや、田常、相と為る。田常、既にして簡公を殺す。諸侯の共に己を誅せんことを懼れ、乃ち尽く魯・衛の侵地を歸し、西は晋・韓・魏・趙氏と約し、南は呉・越の使いを通じ、功を修め、賞を行い、百姓に親しむ。故を以て齊、復た定まる。田常、齊の平公に言いて曰く、「徳施は人の欲する所なり。君、其れを行え。刑罰は人の悪む所なり。臣、請いて之を行わん。」之を行いて五年、齊国の政、皆田常に歸す。田常、是に於いて尽く鮑・晏・監止及び公族の疆き者を誅し、而して齊の安平自り以東琅邪に至るまでを割き、自らの封邑と為す。封邑は平公の食む所より大なり。田常乃ち齊国中の女子の長七尺以上を選び後宮を為す。後宮は百を以て数う。而して賓客舎人をして後宮に出入する者を禁ぜざらしむ。田常卒するに及びて、七十餘男有り。田常卒して、子の襄子盤、代わりて立ち、齊に相たり。常は諡して成子と為す。田襄子、既に齊の宣公に相たるや、三晋、知伯を殺し其の地を分かつ。襄子、其の兄弟宗人をして尽く齊の都邑の大夫と為さしむ。三晋と使いを通じ、且に以て齊国を有たんとす。襄子卒し、子の莊子白立つ。田莊子、齊の宣公に相たり。

413

宣公四十三年、晋を伐ち、黄城を毀り、陽狐を囲む。

412	明年、魯の葛及び安陵を伐つ。
411	明年、魯の一城を取る。莊子卒し、子の太公和立つ。田太公、齊の宣公に相たり。
408	宣公四十八年、魯の郕（セイ）を取る。
407	明年、宣公、鄭人と西城に会す。衛を伐ち、母丘を取る。
405	宣公五十一年、卒す。田會、廩（リン）丘に自りて反く。宣公卒するや、子の康公貸立つ。
391	貸立ちて十四年、酒と婦人に淫し、政に聴かず。太公乃ち康公を海上に遷し、一城を食ましめ、以て其の先祀を奉ぜしむ。
390	明年、魯、齊の平陸を敗る。
389	明年（三年は明年の誤り）、太公、魏の文侯と濁澤に会し、諸侯と為らんことを求む。魏の文侯、乃ち使いをして周の天子及び諸侯に言わしめて、齊の相田和を立てて諸侯と為さんことを請う。周の天子、之を許す。
386	康公の十九年、田和、立ちて齊侯と為り、周室に列し、元年を紀す。
385	齊侯太公和、立ちて二年、和卒す。子の桓公午立つ。
380	桓公午五年、秦・魏、韓を攻む。韓、救いを齊に求む。齊の桓公、大臣を召して謀りて曰く、「蚤く之を救うは、晩く之を救うと孰ぞ。」騶忌曰く、「救う勿きに若かず。」段干朋曰く、「救わざれば、則ち韓、且に折けて魏に入らんとす。之を救うに若かず。」田臣思曰く、「過てるかな、君の謀や。秦・魏、韓を攻めば、楚・趙は必ず之を救わん。是れ、天の燕を以て齊に予うるなり。」桓公曰く、「善し。」乃ち陰かに韓の使者に告げて之を遣る。韓自ら以為らく、齊の救いを得たり、と。因りて秦・魏と戦う。楚・趙、之を聞き、果たして兵を起こして之を救う。齊、因りて兵を起こし燕国を襲いて桑丘を取る。
379	六年、衛を救う。桓公卒し、子の威王因齊立つ。是の歳、故の齊の康公卒す。絶えて後無し。奉邑は皆田氏に入る。
378	齊の威王元年、三晋、齊の喪に因り、来たりて我を靈丘に伐つ。
376	三年、三晋、晋の後を滅ぼして、其の地を分かつ。
373	六年、魯、我を伐ち、陽関に入る。晋、我を伐ち博陵に至る。
372	七年、衛、我を伐ち薛陵を取る。
370	九年、趙、我を伐ち、甄（ケン）を取る。威王、初め位に即きて以来、治めず。政を卿大夫に委ぬ。九年の間、諸侯、並びて伐ち、国人、治まらず。是に於いて、威王、即墨の大夫を召して、之に語げて曰く、「子の即墨に居りし自り、毀言（悪口、そしる言葉）日に至る。然れども吾、人をして即墨を視しむるに、田野は闢け、民人は給（たりる）り、官は留事無く、東方は以て寧し。是れ、子の吾の左右に事え、以て誉れを求めざればなり。」

之に万家を封ず。阿の大夫を召し語げて曰く、「子の阿を守りし自り、嘗の言、日に聞こゆ。然れども使いをして阿を視しむるに、田野は闢けず、民は貧苦す。昔日、趙、甄を攻むるや、子は救うこと能わず。衛、薛陵を取るや、子は知らず。是れは、子の幣を以て吾の左右に厚くし、以て誉れを求むればなり。」是の日、阿大夫を烹る。及びて左右の嘗て誉めし者は、皆并せて之を烹る。遂に兵を起し、西して趙・衛を撃ち、魏を濁澤に敗りて、恵王を困む。恵王、観を献じ以て和解せんことを請う。趙人、我に長城を帰す。是に於いて斉国は震懼し、人人は敢て非を飾らず。務むるに其の誠を尽くし、斉国、大いに治まる。諸侯、之を聞き、敢て兵を斉に致すもの莫きこと、二十餘年。騶忌子、琴を鼓するを以て威王に見ゆ。威王、説びて之を右室に舎す。須臾（シュ・ユ、しばらくして）にして王、琴を鼓す。騶忌子、戸を推して入りて曰く、「善きかな、琴を鼓すること。」王、勃然として説ばず。琴を去てて劍を按じて（劍の柄を押さえて抜く姿勢を見せる）曰く、「夫子は容を見て未だ察せず。何を以てか其の善きを知る。」騶忌子曰く、「夫れ大弦、濁り以て春温なるは、君なり。小弦、廉折（鋭くて高い音）にして以て清めるは、相なり。之を攫（とる）ること（爪で弦を持つこと）深く、之を驛（エキ、おく）くこと（弦を放つこと）愉（やわらか）なるは、政令なり。鈞しく諧（ととのう）いて以て鳴り、大小相益し（助け合う）、回邪（曲折の意。長短の弦が各自の音を発して曲折がある）にして相害せざるは、四時なり。吾、是を以て其の善きを知るなり。」王曰く、「善し、音を語ること。」騶忌子曰く、「何ぞ独り音を語るのみならん。夫れ国家を治めて人民を弭（ビ、やすめる）んずるは、皆其の中に在り。」王又勃然として説ばずして曰く、「夫れ五音（宮・商・角・徴・羽）の紀を語るが若きは、信に未だ夫子の如き者は有らざるなり。夫の国家を治めて人民を弭（ビ、やすんず）んずるは、又何ぞ絲桐（琴又は音楽）の間に為さん。」騶忌子曰く、「夫れ大弦、濁り以て春温なるは、君なり。小弦、廉折にして以て清めるは、相なり。之を攫ること深くして、之を舎くこと愉なるは、政令なり。鈞く諧いて以て鳴り、大小相益し、回邪にして相害せざるは、四時なり。夫れ復して乱れざるは（樂の音調が反復しても乱れない）、昌を治むる所以なり。連なりて徑するは（真直ぐに通じている）、亡を存する所以なり。故に曰く、『琴音、調いて、天下、治まる。』夫れ国家を治めて人民を弭んずるは、五音に若く者は無し。」王曰く、「善し。」騶忌子、見えて三月にして相印を受く。淳于髡（コン）、之に見えて曰く、「善く説けるかな。髡、愚志有り。願わくは諸を前に陳べん。」騶忌子曰く、「謹みて教えを受けん。」淳于髡曰く、「全きを得れば、全く昌え、全きを失えば、全く亡ぶ。」騶忌子曰く、「謹みて令を受けん。請う、謹み

て前を離るる母からん。」淳于髡曰く、「キ(豕に希、豚のこと)膏棘軸(キ・コウ・キョク・ジク、棘で作った車軸に豚の脂を塗ること)するは、滑を為す所以なり。然れども方穿(四角い穴)に運らすこと能わず。」騶忌子曰く、「謹みて令を受けん。請う、謹みて左右に事えん。」淳于髡曰く、「弓膠昔幹(弓は昔、古い幹木に膠を塗って張り付ける)は合を為す所以なり。然れども疏罅(カ、すきま)を傅合(附合と同じ)すること能わず。」騶忌子曰く、「謹みて令を受けん。請う、謹みて自ら万民に附かん。」淳于髡曰く、「狐裘は弊(敝に通じ、やぶれる)れたりと雖も、黄狗の皮を以て補う可からず。」騶忌子曰く、「謹みて令を受けん。請う、謹みて君子を扞びて小人を其の間に雑うる母からん。」淳于髡曰く、「大車も較(はかる)らざれば其の常任(決まった物量)も載すること能わず。琴瑟も較らざれば、其の五音を成すこと能わず。」騶忌子曰く、「謹みて令を受けん。請う、謹みて法律を修めて、姦吏を督(ただす)さん。」淳于髡、説き畢り、趨り出づ。門に至りて、其の僕に面して曰く、「是の人は、吾れが之に微言五を語るに、其の我に応ずること、響の声に応ずるが如し。是の人、必ず封ぜらるること久しからじ。」居ること期年にして、封ぜらるるに下邳を以てし、号して成侯と曰う。

356 威王二十三年、趙王と平陸に会す。

355 二十四年、魏王と会し、郊に田(かり)す。魏王、問いて曰く、「王も亦宝有るか。」威王曰く、「有る無し。」梁王曰く、「寡人の国の若きに小なれども、尚ほ径寸の珠、車の前後を照らすこと各々十二乗なる者、十枚有り。奈何ぞ万乗の国を以てして宝無からんや。」威王曰く、「寡人の宝と為す所以は、王と異なれり。吾が臣に檀子なる者有り。南城を守らしむれば、則ち楚人敢て寇(あだ)を為し、東に取らず。泗上の十二諸侯皆来朝す。吾が臣に盼(ハン)子なる者有り。高唐を守らしむれば、則ち趙人敢て東して河に漁せず。吾が吏に黔夫なる者有り。徐州を守らしむれば、則ち燕人、北門に祭り、趙人、西門に祭り、徙りて従う者七千余家。吾が臣に種(シヨウ)首なる者有り。盜賊に備えしむれば、則ち道に遺ちたるを拾わず。將に以て千里を照らさんとす。豈に特に十二乗のみならんや。」梁の恵王、慙じ、憚らずして去る。

353 二十六年、魏の恵王、邯鄲を囲む。趙、救いを齊に求む。齊の威王、大臣を召して謀りて曰く、「趙を救うは、救わざると孰か。」騶忌子曰く、「救うなきに如かず。」段干朋曰く、「救わざれば則ち不義なり。且つ不利なり。」威王曰く、「何ぞや。」對えて曰く、「夫れ魏氏の邯鄲を并すは、其れ齊に於いては何ぞ利あらんや。且つ夫れ趙を救いて其の郊に軍するは、是れ趙伐たれずして、魏、全きなり。故に南して襄陵を攻め、以て魏を弊れしめ、

	邯鄲、抜かれて、魏の弊れたるに乗ずるに如かず。」威王、其の計に従う。其の後、成侯驪忌、田忌と善からず。公孫閱、成侯忌に謂いて曰く、「公、何ぞ魏を伐つを謀らざるや。田忌、必ず将たらん。戦いて勝ちて功有らば、則ち公の謀は中るなり。戦いて勝たずして、前みて死するに非ずんば、則ち後きて北げん。而して命は公に在り。」是に於いて成侯、威王に言いて、田忌をして南のかた襄陵を攻めしむ。十月、邯鄲、抜かる。斉、因りて兵を起し、魏を撃ち、大いに之を桂陵に敗る。是に於いて斉、最も諸侯に彊し。自ら称して王と為し、以て天下に令す。
346	三十三年、其の大夫牟辛を殺す。
344	三十五年、公孫閱、又、成侯忌に謂いて曰く、「公、何ぞ人をして十金を操りて市に卜し、『我、田忌の人なり。吾、三たび戦いて三たび勝ち、声は天下に威たり。大事を為さんと欲すも、亦吉なるか、不吉なるか。』と曰わしめざるか。」卜者出づ。因りて人をして之が為に卜する者を捕らえしめ、其の辞を王の所に驗かにす。田忌、之を聞き、因りて遂に其の徒を率い襲いて臨菑を攻め、成侯を求むるも、勝たずして犇る。
343	三十六年、威王卒し、子の宣王辟疆立つ。
342	宣王元年、秦、商鞅を用う。周、伯（覇に通ず）を秦の孝公に致す。
341	二年、魏、趙を伐つ。趙、韓と親しみ、共に魏を伐つ。趙、利有らず。南梁に戦う。宣王、田忌を召し、故の位に復す。韓氏、救いを斉に請う。宣王、大臣を召して謀りて曰く、「蚤くに救うは、晩きに救うと孰ぞ。」驪忌子曰く、「救うなきに如かず。」田忌曰く、「救うなからば、則ち韓は且に折けて魏に入らんとす。蚤くに之を救うに如かず。」孫子（孫臏）曰く、「夫れ韓・魏の兵、未だ弊れずして之を救わば、是れ吾、韓に代わりて魏の兵を受け、顧反って命を韓に聴かん。且つ魏は国を破るの志有り。韓、亡ぶるを見ば、必ず東面して斉に愬（ソ、訴に同じ）えん。吾因りて深く韓の親を結びて、晩くに魏の弊るるを承けば、利を重ねて、尊名を得可からん。」宣王曰く、「善し。」乃ち陰かに韓の使者に告げて之を遣る。韓、因りて斉を恃み、五たび戦い勝たずして、東して国を斉に委ぬ。斉、因りて兵を起し、田忌・田嬰をして将たらしめ、孫子を師と為し、韓・趙を救い、以て魏を撃ち、大いに之を馬陵に敗り、其の将龐涓（ホウ・ケン）を殺し、魏の太子申を虜にす。其の後、三晋の王、皆田嬰に因りて斉王に博望に朝し、盟して去る。
336	七年、魏王と平阿の南に会す。
335	明年、復た、甄に会す。魏の恵王卒す。
334	明年、魏の襄王と徐州に会す。諸侯、相い王たり。
333	十年、楚、我が徐州を囲む。

332	十一年、魏と趙を伐つ。趙、河水を決し、斉・魏に灌ぎ、兵罷む。
325	十八年、秦の恵王、王を称す。宣王、文学遊説の士を喜ぶ。騶衍・淳于髡・田駢（ベン）・接予・慎到・環淵の徒の如き自り七十六人、皆列第（貴族たちの屋敷）を賜う。上大夫と為り、治めずして論を議す。是を以て斉の稷下の学士、復た盛んにして、且に数百千人にならんとす。
324	十九年、宣王卒し、子の湣王地立つ。
323	湣王元年、秦、張儀をして諸侯の執政と齧桑（ゲツ・ソウ）に会せしむ。
321	三年、田嬰を薛に封ず。
320	四年、婦を秦より迎う。
317	七年、宋と魏を攻め、之を觀澤に敗る。
312	十二年、魏を攻む。楚、雍氏を囲む。秦、屈丐（クツ・カイ、楚の大夫）を敗る。（斉の）蘇代、田軫（別名、陳軫、時に楚王に寵遇されていた。張儀と仲悪し）に謂いて曰く、「臣願わくは公に謁ぐる有らん。其れ事為るや甚だ完く、楚をして公を利せしめん。成らば福と為り、成らざるも亦福と為らん。今者（ちかごろ）、臣、門に立ちしに、客に言える有りて曰く、魏王、韓馮・張儀に謂いて曰く、『煮棗、将に抜かれんとし、斉の兵又進む。子、来たりて寡人を救わば則ち可なり。寡人を救わずんば、寡人、抜くに能（たえる）えじ。』、と。此れ特に辞を転ずるなり（暗にこちらの意図を悟らせて、こちらに目を向けさせようとの意を含んだ言葉。）。秦・韓の兵、東する（魏に兵を進める）毋きこと旬余なれば、則ち魏氏は転じ（秦の與国から転じて斉・楚に近づく）、韓は秦に従う。秦は張儀を逐い、臂を交わして斉・楚に事う。此れ公の事成るなり。」田軫曰く、「奈何して東すること無からしめん。」對えて曰く、「韓馮の魏を救うの辞は、必ず韓王に謂うに、馮は以て魏の為にすと曰ず。必ず馮、将に秦・韓の兵を以て、東して斉・宋を却けんとし、馮、因りて三国の兵を搏（にぎる）り、屈丐の弊に乗じて、南して楚より割かば、故の地は必ず尽く之を得ん、と曰ん。張儀の魏を救うの辞は、必ず秦王に謂うに、儀は以て魏の為にすと曰ず。必ず、儀且に秦・韓の兵を以て東して斉・宋を距がんとし、将に三国の兵を搏り、屈丐の弊に乗じて、南して楚より割かば、名（名目）は亡国を存し、実は三川に代えて（韓が楚による侵地を取り戻した代わりに、秦が三川の地に勢力を張る）、帰る。此れ王業なり、と曰ん。公、楚王をして韓氏に地を與えしめ、秦をして（楚と韓の）和を制せしめ、秦王に謂いて、請う、韓に地を與えん。而して王は以て三川に施（かえる）よ、と曰え。（そうすれば韓は）韓氏の兵、用いずして、地を楚より得ん、韓馮の兵を東するの辞は、且に秦に何とか謂わんとするや。秦の兵、用いずして三川を得て、楚・韓を伐ち以て魏を寤（キン、くるしめる）しめば、魏氏敢

	て東せず。是れ齊を弧にするなり、と曰ん。張儀の兵を東にするの辞は、且に何とか謂わんとするや。秦・韓、地を欲して、兵、案（按と同じ、引き止めておく）ずる有り。聲威、魏に発す。魏氏の齊・楚を失わざらんと欲するは、資（理由）有らん、と曰ん。魏氏、秦・韓より転じ、争いて齊・楚に事えん。楚王、欲すれども、地を與うる無きに、公、秦・韓の兵を用いずして地を得しめば、一大徳有り。秦・韓の王、韓馮・張儀に劫かされて、兵を東し以て魏に徇服（従う）せば、公は常に左券を執り、以て秦・韓を責めよ。此れ公に善くして張子に悪しくせんこと、資多し。」
311	十三年、秦の恵王卒す。
301	二十三年、秦と與に撃ちて楚を重丘に敗る。
300	二十四年、秦、涇陽君をして齊に質たらしむ。
299	二十五年、涇陽君を秦に帰す。孟嘗君薛文、秦に入り、即ち秦に相たり。文、亡げ去る。
298	二十六年、齊、韓・魏と共に秦を攻め、函谷に至り、焉に軍す。
296	二十八年、秦、韓に河外を與え以て和す。兵罷む。
295	二十九年、趙、其の主父を殺す。齊、趙を佐け、中山を滅ぼす。
288	三十六年、王、東帝と為り、秦の昭王、西帝と為る。蘇代、燕自り来たり齊に入り、章華の東門に見ゆ。齊王曰く、「嬉し。善く子来れり。秦、魏冉をして帝を致さしむ。子、以て何如と為す。」對えて曰く、「王の臣に問うや、卒（にわか）にして、而も患いの従りて来る所は微（微妙）なり。願わくは王、之を受けて称する（備は衍字）勿れ。秦、之を称して、天下、之に安んぜば、王、乃ち之を称するも、後るること無からん。且つ帝名を譲るも争うも傷うこと無きなり。秦、之を称し、天下、之を悪まば、王因りて称する勿く、以て天下を収めよ。此れ大いなる資なり。且つ天下に両帝立たば、王、天下を以て齊を尊ばんと為すか、秦を尊ばんか。」王曰く、「秦を尊ばん。」曰く、「帝を积（すてる）てば、天下、齊を愛すか、秦を愛すか。」王曰く、「齊を愛して、秦を憎まん。」曰く、「両帝立ち、約して趙を伐つは、桀宋（宋の偃王のこと。暴虐だったので、夏の桀王に因んで桀宋と言った。）を伐つの利と孰れぞ。」王曰く、「桀宋を伐つの利なり。」對えて曰く、「夫れ約は鈎し、而れども秦と與に帝と為らば、天下、独り秦のみを尊びて齊を軽んず。帝を积てば則ち天下、齊を愛して、秦を憎む。趙を伐つも桀宋を伐つの利に如かず。故に願わくは王、明らかに帝を积て、以て天下を収め、約に倍きて秦を賓（擯に通じ、しりぞける）し、重きを争う無く、而して王は其の間を以て宋を挙げよ。夫れ宋を有たば、衛の陽地は危からん。濟西を有たば、趙の阿東国、危からん。淮北を有たば、楚の東国、危からん。陶・平陸を有たば、梁門、開かず。帝を积てて之に貸

	<p>するに（加えて）、桀宋を伐つの事を以てせば、国、重くして名尊からん。燕・楚の形服（形勢で自然に服従する）する所以にして、天下敢て聴かざるもの莫からん。此れ湯・武の挙なり。秦を敬み以て名を為し、而る後に天下をして之を憎ましむ。此れ所謂卑を以て尊と為す者なり。願わくは王、之を孰慮せよ。」是に於いて斉、帝を去て、復た王と為る。秦も亦た帝位を去つ。</p>
286	<p>三十八年、宋を伐つ。秦の昭王、怒りて曰く、「吾の宋を愛するは、新城・陽晋を愛すると同じなり。韓聶は吾と友なり。而るに吾の愛する所を攻むるは、何ぞや。」蘇代、斉の為に秦王に謂いて曰く、「韓聶の宋を攻むるは、王の為にする所以なり。斉は疆く、之を輔くるに宋を以てすれば（更に宋を味方にすれば）、楚・魏、必ず恐れん。恐れれば必ず西して秦に事えん。是れ、王、一兵も煩わさず、一士も傷わず、事無くして安邑を割くなり。此れ韓聶の王に禱（いのる）る所なり。」秦王曰く、「吾、斉の知り難きを患う。一たび従し、一たび衡す。其の説は何ぞや」對えて曰く、「天下の国、斉をして知る可からしめんか。斉、以て宋を攻む。其れ秦に事えて、万乗の国を以て自ら輔くるを知るらん。西して秦に事えずんば、則ち宋の治は安からじ。中国の白頭の游敖の士、皆智を積みて、斉・秦の交わりを離さんと欲す。式（車上の人が寄りかかって礼をする横木）に伏し、軼（テツ、轍に通じ、わだち）を結びて（頻繁に往来すること）、西に馳せる者、未だ一人も斉に善くせよ、と言う者有らじ。式に伏し、軼を結びて、東に馳せる者、未だ一人も秦に善くせよ、と言う者有らざるなり。何となれば、則ち皆、斉・秦の合うを欲せざればなり。何ぞ晋・楚の智にして、斉・秦の愚かなるや。晋・楚、合わば、必ず斉・秦を議せん。斉・秦、合わば、必ず晋・楚を凶らん。請う、此れを以て事を決せよ。」秦王曰く、「諾。」是に於いて斉、遂に宋を伐つ。宋王、出亡し、温に死す。斉、南して楚の淮北を割き、西して三晋を侵し、以て周室を并せて天子為らんと欲す。泗上の諸侯・鄒魯の君、皆臣を称し、諸侯、恐懼す。</p>
285	<p>三十九年、秦、来たりて伐ち、我が列城（連なっている城）九を抜く。</p>
284	<p>四十年、燕・秦・楚・三晋、謀を合わせ、各々鋭師を出だし、以て伐ち、我を濟水に敗る。王、（守備の陣を）解きて却く。燕の将樂毅、遂に臨菑に入り、尽く斉の宝蔵器を取る。潛王、出亡し、衛に之く。衛君、宮を辟けて之に舍し、臣を称して、共具す。潛王、不遜にして、衛人、之を侵す。潛王、去り、鄒・魯に走る。驕色有り。鄒・魯の君、内れず。遂に莒に走る。楚、淖（ドウ）齒をして兵を將いて斉を救わしむ。因りて斉の潛王に相たり。淖齒、遂に潛王を殺し、燕と共に斉の侵地鹵器を分く。潛王の殺に遇うや、其の子法章、名姓を変じて、莒の太史敖の家庸と為る。太史敖</p>

	<p>の女、法章の状貌を奇とし、以為らく、恒人に非ず、と。憐れみて常に窃かに之に衣食して、與に私通す。淖齒、既に以て管を去る。管中の人及び齊の亡臣、相聚りて、湣王の子を求めて、之を立てんと欲す。法章、其れの己を誅せんことを懼れ、之を久しうして、乃ち敢て自ら、我、湣王の子なり、と言う。是に於いて管人、共に法章を立つ。是を襄王と為す。以て管城に保じ、而して齊国中に、王已に立ちて管に在り、と布告す。襄王既に立ち、太史氏の女を立てて王后と為す。是を君王后と為す。子の建を生む。太史敖曰く、「女は媒（仲人）を取らず、因りて自ら嫁す。吾が種に非ず。吾が世を汗（けがす）す。」終身、君王后を覩ず。君王后、賢なりて、覩ざるの故を以て、人の子の礼を失わず。襄王、管に在ること五年、田單、即墨を以て攻め、燕軍を破り、襄王を管より迎えて、臨菑に入る。齊の故地尽く復た齊に属す。齊、田單を封じて、安平君と為す。</p>
270	十四年、秦、我が剛・壽を撃つ。
265	十九年、襄王卒し、子の建、立つ。
259	<p>王建立ちて六年、秦、趙を攻む。齊・楚、之を救う。秦、計りて曰く、「齊・楚、趙を救い、親（近づく）しまば則ち兵を退け、親しまざれば則ち遂に之を攻めん。」趙、食無く、粟を齊に請う。齊、聴かず。周子曰く、「之を聴き以て秦の兵を退くるに如かず。」聴かず。則ち秦の兵却かず。是れ秦の計、中りて、齊・楚の計、過てるなり。且つ趙の齊・楚に於けるや、扞蔽（藩屏）なり。猶ほ齒の唇有るや、唇亡ければ齒寒しのごときなり。今日、趙、亡ぶれば、明日患いは齊・楚に及ばん。且つ趙を救うの務めは、宜しく漏甕（ロウ・オウ、穴の開いた甕）を奉じて、焦釜に沃ぐが若くなるべきなり。夫れ趙を救うは、高義なり。秦の兵を却くるは、顕名なり。義は亡国を救い、威は疆秦の兵を却く。此れを為すことに務めずして、粟を愛することに務む。国の計を為す者は過てり、」齊王聴かず。秦、趙を長平に破ること四十余万。遂に邯鄲を囲む。</p>
249	十六年、秦、周を滅ぼす。君王后卒す。
242	二十三年、秦、東郡を置く。
237	二十八年、王、入りて秦に朝す。秦王政、咸陽に置酒す。
230	三十五年、秦、韓を滅ぼす。
228	三十七年、秦、趙を滅ぼす。
227	三十八年、燕、荊軻をして秦王を刺さしむ。秦王、覺り、軻を殺す。
226	明年、秦、燕を破る。燕王、亡げて遼東に走る。
225	明年、秦、魏を滅ぼす。秦の兵、歴下に次（駐屯）す。
223	四十二年、秦、楚を滅ぼす。
222	明年、代王嘉を虜にし、燕王喜を滅ぼす。

221

四十四年、秦の兵齊を打つ。齊王、相后勝の計に聴き、戦わずして兵を以て秦に降る。秦、王建を虜にし、之を共に遷す。遂に齊を滅ぼし、群と為す。天下壹に秦に并せらる。秦王政、号を立てて皇帝と為る。始め、君王后賢にして、秦に事えて謹み、諸侯に與して信あり。齊も亦た東のかた海上に辺す。秦、日夜、三晋・燕・楚を攻む。五国各々自ら秦より救う。故を以て王建、立ちて四十余年、兵を受けず。君王后死し、后勝、齊に相たりて、多く秦の間金を受け、多く賓客をして秦に入らしむ。秦又多く（賓客に）金を予う。客皆反って間を為し、王に勸めて、従を去てて秦に朝し、攻戦の備えを修めず、五国を助けて秦を攻めず。秦、故を以て五国を滅ぼすを得たり。五国已に亡び、秦の兵、卒に臨菑に入る。民、敢て格（たたかう）する者莫し。王建遂に降りて、共に遷さる。故に齊人、王建の蚤くに諸侯と合従して秦を攻めずして、姦臣賓客に聴き以て其の国を亡ぼししを怨み、之を歌いて曰く、「松耶栢耶、建を共に住ましめし者は客なるか。」建の客を用うることの詳（あきらか）かならざるを疾（にくむ）むなり。

太史公曰く、「蓋し、孔子は晩にして易を喜ぶ。易の術為るや、幽明（幽玄で明徹）にして遠し（りことが深遠である）。通人達才（事理に通曉し達識のある人）に非ずんば、孰か能く焉に意を注がん。故に周の太史の田敬仲完を卦するや、占、十世の後に至る。完、齊に奔るに及びて、懿仲、之を卜して、亦た云えり。田乞及び常が比びて二君を犯し、齊国の政を専らにせし所以は、必ずしも事勢の漸く然りしに非ざるなり。蓋し兆祥（兆候）に遵厭（遵はしたがう、厭は当って合う）するが若しと云えり。」